

闘牛な日々 -走れ卒業論文- 環境学研究科 地理学専攻修士2年 石川菜央

「闘牛は男のロマンだああっ!」、「牛の突き合う音にゾクゾクするぜ」興奮する男達、「あんたモーいい加減に牛はやめなさい」怒る女達。様々な思惑が交錯するここは闘牛場。山のてっぺんにあるこの場所へ、私は何回も汗だくになって登った。

発端は研究室の宇和島実習旅行だった。日本の闘牛はスペインのそれとは異なり、牛同士を闘わせるスペクタクル。実習が始まる1週間前に闘牛大会が開かれるという情報を入手した私は、一足早く宇和島へ入り単身闘牛場へと乗り込んだ。会場裏にて、雄叫びを上げて勝負の時を待つ1t近い巨体の牛と対面し(雄叫びを上げたのは私ではなく牛である。念のため)、牛主達に突撃インタビュー。彼らは毎日、牛の世話からトレーニングまでオールマイティにこなして勝負に備えてくる。牛にかける手間と情熱は我が子へのそれを凌ぐほどである。彼らの熱い語りに血沸き肉踊ってしまった。いつの間にか卒論のテーマは闘牛になっていた。実習旅行で得たものを大幅にバージョンアップさせるため、宇和島に滞在した日数は合計で約1ヶ月に達した。牛主が1人で牛を飼っているように見えて、じわじわと分かってくる牛主を核とした恐るべき濃いネットワーク。こうして深い深い闘牛の世界にはまり込み、今までで一番「熱い」夏を過ごし、電話帳のように厚くなったデータと格闘するうちに月日は飛ぶように流れた。季節は天高く肥ゆる秋である。うず高く積み上げられていく資料と遅々として進まない筆。書くべし書くべしと自分に言い聞かせながら、牛が歩むように1文字、1文字を書いていった。実を言うと私は一昨日まで闘牛場で調査をしていた。これは卒論が書けなかったためでは断じてない! 何と修士論文でも闘牛に取り組んでいるのである。走り始めた私の中の牛は、今だ爆走中。闘牛な日々はまだまだ続きそうである。